

# 『日本のヴァイオリン王』鈴木政吉の生涯と幻の名器』 著者の愛知県立芸術大学井上さつき教授に聞く

鈴木鎮一先生の父、政吉さんに関する初の本格的評伝が出版されました。

私の専門はフランス近代音楽史です。「万国博覧会と音楽」というテーマで研究を続けています。最初に鈴木政吉さんの名前を見たのが、フランスの国立図書館でした。1900年にパリで開催された第5回万博の楽器部門の受賞者一覧に、「スズキマサキチ、ジャポン」とフランス語で綴られているのを十数年前に見つけたのです。その後



鈴木政吉の初の本格的評伝になった『日本のヴァイオリン王』（中央公論新社）2,700円（税別）

政吉が名古屋の老舗 鈴木バイオリン製造株式会社創業で、もともとは三味線の職人であり、才能教育で有名な鈴木鎮一さんの父であったことを知り、俄然興味がありました。こんなにすごい人なのに、なぜ日本で業績が知られていないのか。

政吉は、1887年に初めて見たヴァイオリンを見よう見まねで製作し、早くも3年後には第3回国勧業博覧会に入賞。93年の米国シカゴ・コロンプス万博でも、見事に受賞しています。そして1900年のパリ万博。政吉は日本から本場ヨーロッパに洋楽器であるヴァイオリンを出品し、上位入賞を目指していたのです。この時、日本からは川上貞奴（※）の一座がパリに渡航し、日本の芝居を上演して人気を集めました

※日本の女優第1号

だが、内容は歌舞伎もどきの舞台。当時日本では、まだ女優という存在すら定着していなかったのです。私たちが考えるよりも、ずっと江戸時代の文化が近かった時期に、三味線職人からヴァイオリン製作に身を投じる、鮮やかな転身ぶりに惹かれました。

政吉は、「ものづくりニッポン」の典型的人物であると同時に、世界的に見ても極めてすぐれた楽器職人であったと思います。しかも、量産と手作りとの両方を極めた点で、単なる高級手工楽器だけを作る職人とは違った、企業家精神の持ち主でもあり、完全に独学で、誰からも教えられずにヴァイオリンを作っていたのです。その起業家精神と表裏一体をなしていたのが、政吉の「音」に対する並外れた芸術的感性で、「鳴り音」

に対するこだわりと、追求は生涯変わることはありませんでした。

これらは、フランス近代音楽史の研究と並行して、5年前から政吉についての本格的な調査活動を始めて、わかったことです。しかし、資料収集は困難を極めました。たとえば、フランスであれば絶対に残っているはずの資料（政吉が外遊した時に、当時の文部省に提出したはずの報告書など）がまったく残っていません。「名古屋商業会議所報告」など、現存する資料を片端から調べると、できるかぎり調査しましたが、あと15〜20年早く研究に取りかかっていたら



ヴァイオリン製作者として数々のコンクール入賞の実績を持つ松下敏幸さん。「1929年にこのような素晴らしいヴァイオリンを作る日本人がいたということ。それを後世に伝えていくことは、私たちの責任です」（5月10日、愛知県立芸大でのレクチャーコンサートで）



松浦さんから愛知県立芸大に寄贈された政吉の1929年製のヴァイオリンは、数奇な運命を辿ったものの、松下さんの修復で、現代に蘇った。「演奏している間も、目に見えて音が変わり、楽器が鳴るように変わったのが印象的。線の太い音です」



井上さつき  
東京藝術大学音楽学部楽理科、同大学院修了。パリ＝ソルボンヌ大学修士課程修了。著書に『音楽を展示する——パリ万博 1855-1900』など。「学生時代にヴァイオリン科の馬場仲次郎先生クラスの伴奏を手伝ったり、ドビュッシーを研究する米国の大学教授が、スズキのチェロ科の指導者だったことも知り、ご縁を感じます」

ば、政吉自身を直接知っていた方のお話を伺えたのに、と臆を囁む思いもしました。それでも、今回、私の研究がきっかけで、政吉が精魂こめて作った素晴らしいヴァイオリンが複数発見されたことは望外の喜びです。

調査過程で、クレモナで素晴らしい弦楽器を作り続けている松下敏幸さんと一緒に、政吉が製作したヴァイオリンを、学習院大学史料館で拝見する機会がありました。それは故高松宮宣仁親王が使われた分数量器でした。その際に、皇太子殿下がお持ちのヴァイオリンが、政吉の1926年製であることがわかりました。さらに、中日新聞で当時私が担当していたコラムに、

政吉の手工ヴァイオリンを探していることを書き、情報提供を呼びかけた結果、政吉の1929年製ヴァイオリンを所有する愛

知県の元小学校校長、松浦正義さんが名乗りを上げられたのです。松下さんの鑑定によつて、この2台が政吉の円熟期の作品であり、個性の表れやすい象徴細工などよく似た特徴を持つていることがわかりました。複数の楽器を鑑定することで、作家性を判断できることも学びました。

鈴木鎮一さんに関しても、大変興味深く調べることができました。そしてこの親子には、共通のDNAを強く感じました。伝統から離れたところから、新しい分野に果敢にチャレンジすることです。クラシック音楽の伝統からは遠い三味線の世界から洋楽器製造を始めた政吉、「どの子も育つ」の理念で、従来とはまったく異なる幼児教育の新しい地平を築いた鎮一。ピアノ教育の研究はさかんですが、私自身の中では、この分野のさらなる研究を重ねてみたいという思いが募っているのです。